東南アジアのイスラム過激派組織
－国際政治暴力・テロリズム研究センター：ローハン・グナラトナ所長に聞く（下）－

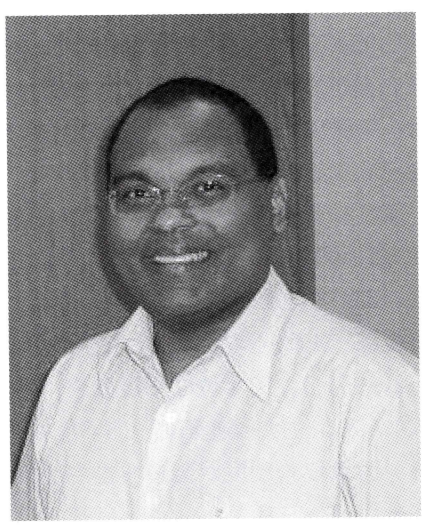
国際テロ組織の「アルカイダ」がイスラム原理主義の教義と「サラフィ・ジハード（世界聖戦）」の理念をイスラム教徒社会に浸透させていく限り、新世代の構成員を中心とする連携組織が各地で増殖していく状況がある。前号（2004年５月15日号）では、グナラトナ所長からこうした状況に対抗するための新しい「対テロ」の概念とテロ組織に対する「思想戦」の重要性について聞いた。今回は東南アジアのミンダナオ、アチェ、タイ最南部などにおけるイスラム過激派組織の活動実態と、それらの組織と「アルカイダ」および東南アジアのテロ組織「ジュマー・イスラミア」との連携関係を解説してもらった。（４月下旬、シンガポール・南洋工科大学の国際戦略研究所〔ＩＤＳＳ〕にて）。（聞き手＝勝田悟）

アルカイダ－ＪＩ－ＡＳＧ連携

――東南アジア地域に跨るテロ組織「ジュマー・イスラミア（ＪＩ）」はフィリピン南部のミンダナオを拠点に活動するイスラム過激派組織「アブサヤフ（ＡＳＧ）」とは実質的にどのような関係にあるのか。欧米や日本のメディアには、米国政府が海外テロ組織に指定している両組織の連携は既定事実であるかのような報道も多い。しかし、「世界聖戦（ジハード）」の理念を掲げ宗教性の強いＪＩと、半ば犯罪集団化したＡＳＧには思想面での齟齬も大きいのでは。テロ訓練基地の設営地域（注１）でも明らかなように、ミンダナオでＪＩが組織として密接な連携関係にあるのは反政府組織「モロ・イスラム解放戦線（ＭＩＬＦ）」のほうだ。

「確かに、構成員１万2,000人を擁し、政治組織としても比較的に統制がとれたＭＩＬＦは、ＪＩやその背後にある国際テロ組織『アルカイダ』にとって訓練基地の設営だけでなく、テロ作戦遂行の面でも主要な連携組織であるのは間違いない。

一方、ＡＳＧもオサマ・ビンラーディンがその創設（91年）に個人的に関与した経緯もあり、創設者のアブドゥラジャク・ジャンジャラニ（Abdurajak Abubakar Janjalani）がリーダーの時代は『アルカイダ』を中心にするイスラム原理主義組織のネットワークでは重要な組織だった。


ローハン・グナラトナＩＣＰＶＴＲ所長

しかし、98年にアブドゥラジャクがフィリピン国軍との戦闘で死亡し、弟のカダフィ・ジャンジャラニ（Khaddafy Abubakar Janjalani）が後継してから、ＡＳＧは身代金目的の誘拐を繰り返し犯罪集団化するとともに、活動資金の分配を巡り複数の小グループに分裂した。『アルカイダ』は

（注１）ＭＩＬＦ支配地の訓練基地

ミンダナオで「ジュマー・イスラミア（ＪＩ）」が設営するテロ訓練基地については、前号（2004年5月15日号）掲載のインタビュー（上）で詳述した。

（注２）「アルカイダ」－ＡＳＧ間の資金「パイプ役」

フィリピンの対テロ特別部隊は５月３日、「アルカイダ」から「アブサヤフ（ＡＳＧ）」へのテロ活動費を管理していたフィリピン人、ハイル・マルバン・ムンドゥス（Khair Malvan Mundus）容疑者（40、別名アイマン：Ayman）をミンダナオ島サンボアンガ市内で逮捕した。同容疑者はアラビア語の学生と偽って、96年から03年までサウジアラビアとフィリピンの間を何度も往復しており、サウジを拠点にする慈善団体で「アルカイダ」のフロント組織として知られる「アルハラマイン（Al Haramain）」財団から提供された資金をＡＳＧリーダーのカダフィ・ジャンジャラニに送金していた。フィリピン国家警察（ＰＮＰ）の捜査で判明しているだけでも８万9,000ドルが同容疑者を通じてＡＳＧに渡っていた。

ムンドゥス容疑者は故アブドラジャクがＡＳＧリーダーだった頃から資金調達役を務めており、ＰＮＰの把握しているのは同容疑者がＡＳＧに送金した金額のほんの一部とみられる。こうした事実からも、「アルカイダ」がＡＳＧに一貫して活動資金を提供してきたことは間違いない。

カダフィ・ジャンジャラニ

現在まで資金援助を継続している(注２)ものの、このように政治性が希薄になったＡＳＧとは一定の距離を置くようになっていた。

この間、同じく『アルカイダ』と連携するＪＩは着実にネットワークを拡大し、主にＭＩＬＦと連携してフィリピン国内だけでなく域内各地で『世界ジハード』の一環としてのテロ活動を活発化させてきた。

ところが、最近になって『アルカイダ』、ＪＩ、ＡＳＧという３組織の相互関係に関して治安当局にとっては警戒すべき変化が現れている。それは『アルカイダ』とＪＩがテロ作戦遂行に再びＡＳＧの細胞を主体的に活用するなど、『アルカイダ』－ＪＩ－ＡＳＧ連携が緊密化している徴候があることだ(注３)。その背景には、現在フィリピン政府と和平交渉に入っているＭＩＬＦが、『アルカイダ』やＪＩが計画するテロ活動に対して以前より消極的になってきたという事情がある。

最近、治安当局がマニラ首都圏に潜伏するＡＳＧ作戦遂行細胞の摘発行動を実施しているのも、こうした新しい『アルカイダ』－ＪＩ－ＡＳＧ連携の動向を察知したからだ」

「このテロ計画の背景には『アルカイダ』－ＪＩ－ＡＳＧ連携があり、私はマドリードでの列車爆破テロと連動したテロ計画だった可能性が高いとみている。もっとも、逮捕されたＡＳＧのテロ遂行細胞の構成員にはそうした背後の指令系統は知らされていないだろう。マニラ首都圏にはまだ潜伏しているＡＳＧの細胞があり、厳重な警戒が必要だ(注４)。

また、フィリピン国内で今後テロ活動を激化させる可能性があるイスラム原理主義組織に『ラジャー・ソリマン運動(ＲＳＭ：Raja Solaiman Movement)』がある。最近ではＪＩやＡＳＧとの連携関係を強化していることが明らかになっており、３月末に摘発されたマニラ首都圏のＡＳＧ細胞とも活動を共にしていた。

ＲＳＭはバリク・イスラム(Balik Islam)と呼ばれるイスラム教への改宗者が中心になって90年代に密かに結成されていたが、フィリピン政府がその活動を知るようになったのはそれほど過去のことではない。バリク・イスラムは生来のイスラム教徒よりも原理主義的な狂信性が強いとされ、ＲＳＭはテロ組織としてはまだアマチュアのところがあるが凶悪なテロ攻撃の遂行を厭わない信念がある。しかも、拠点地域をミンダナオ島に置く他のイスラム過激派組織と異なり、ＲＳＭは首都マニラがあるルソン島を拠点にしているだけに治安当局はその動向に神経を尖らせている(注５)。

ＪＩが93年の結成以来、秘密裏に東南アジア全域にネットワークを構築していったように、『アルカイダ』がイスラム原理主義と『世界ジハード』の理念で各国の過激派分子を教導している限り、ＲＳＭのような新しいテロ組織が誕生し成長する可能性は常にある」

ラジャー・ソリマン運動

――スペインでは３月11日にマドリードでの列車同時爆破テロ(死者191人)が発生したが、フィリピンでもマニラ首都圏で列車やショッピングモールの同時爆破を計画していた「最も危険なテロリスト細胞」(アロヨ大統領)が同月末に摘発され、ＡＳＧの構成員６人が逮捕された。ＴＮＴ火薬約36キロも押収されており、治安当局は文字通り瀬戸際で大規模な爆弾テロを阻止したことになる。

(注３)ＪＩの「補給細胞」の摘発

フィリピンの対テロ特別部隊は４月３日、ミンダナオ島コタバト市内で「ジュマー・イスラミア(ＪＩ)」の「補給細胞」を摘発し、ＪＩ幹部のフィリピン人、ヨルダン・マムソ・アブドゥラ(Jordan Mamso Abdullah)容疑者(46)を逮捕している。同容疑者は、2000年の「リサール・デー(12月30日)」に発生したマニラ首都圏５カ所での同時爆破テロ(死者22人、負傷者120人以上)など過去に同国内で発生した複数のテロ事件で物資補給と資金調達に重要な役割を果たしていたとみられる。特に注目すべきは、最近の供給先には「アブサヤフ(ＡＳＧ)」のテロ遂行細胞も含まれていたことである。

エルミタ国防相によると、治安当局は「アルカイダ」から送金されたとみられる２万5,000ドルを追跡調査する中でヨルダン容疑者にたどり着いた。この「補給細胞」の活動には通称ズルキフリ(Zulkifli)というインドネシア人が資金を送金していたという。

(注４)マニラ首都圏のＡＳＧ細胞

フィリピン国軍(ＡＦＰ)司令部は５月４日、最近の一連の「アブサヤフ(ＡＳＧ)」細胞の摘発にもかかわらず、まだ首都圏には10人ほどのＡＳＧ構成員が潜伏しテロ攻撃の機会をうかがっていると発表している。

ＫＭＭとＪＩ

――マレーシア治安当局は、米同時多発テロ（「9・11テロ」）が発生する直前の01年６月の時点で、『アルカイダ』と連携する地元のイスラム原理主義組織「マレーシア聖戦士集団（ＫＭＭ：Kumpulan Mujahidin Malaysia）」の摘発を開始している（注６）。一方、同じくマレーシアで結成されたＪＩは、シンガポール治安当局が同年末に国内の細胞組織を摘発したことでその存在が表面化した。ＫＭＭとＪＩはどのような関係にあるのか。

「ＫＭＭとＪＩはその出自からも基本的には別系統の組織だ。ＫＭＭは、マレーシアの野党である全マレーシア・イスラム党（ＰＡＳ）内部で『米国を中心とするキリスト教・ユダヤ教文明によるイスラム世界への新十字軍』に対して軍事的な『ジハード』も辞さないとする急進派分子が、95年に秘密組織として結成した（注７）。

99年から指導者となったニック・アドゥリ（Nik Adli Nik Aziz：国内治安法の適用で同国治安当局の拘留下）は、当時マレーシアに滞在していたインドネシア人イスラム聖職者のアブバカル・バアシル師やハンバリ師（本名：リドゥアン・イサムディン）などと親交を深めたことから、ＫＭＭはこれらの聖職者の指導を受けるようになった。

一方、ＪＩの母体組織は93年に同じくインドネシア人聖職者のアブドゥラ・スンカル（Abudullah Sungkar）師とバアシル師の２人によって創設されたが、99年にスンカル師が62歳で心臓発作により死亡した後は、バアシル師が政治指導者、ハンバリ師が軍事指導者という二頭体制で指揮してきた。ＪＩのその後のテロ活動やそれに対する各国治安当局の捜査・摘発活動については近年海外メディアでもある程度報道されているので、ここで詳細は説明しない。

アブドゥラ・スンカル師

ＫＭＭ、ＪＩ共に『アルカイダ』とは密接な連携関係にあり、両組織は一部指導者が重複しているところもある。しかし、顕著な違いは、ＫＭＭの構成員はマドラサ（イスラム神学校）などを卒業した元宗教学生・青年が中心になっているのに対して、ＪＩマレーシア支部の構成員には工業大学卒業生など理学・工学系の青年が多いことだろう。また、ＫＭＭは結成の経緯からもＰＡＳの急進派と関係が深い。テロ組織としては、ＪＩのほうがＫＭＭよりはプロフェッショナルな活動形態を有しているといえる」

ＧＡＭの本質は民族運動

――インドネシアのナングル・アチェ州（ダルサラーム）で分離独立闘争を展開している「自由アチェ運動（ＧＡＭ）」は「アルカイダ」と何らかの繋がりがあるのか。

「ＧＡＭは基本的にアチェ州の分離独立を目指す民族主義的な運動で、イスラム原理主義に基づく宗教性を持った組織ではないし、ＧＡＭの指導層も『世界ジハード』とは何の関係もないと言明している。

（注５）ＲＳＭ細胞の摘発

「ラジャー・ソリマン運動（ＲＳＭ）」は中部ルソン地方のイスラム慈善団体と連携したマドラサ（イスラム神学校）の教師や学生によるイスラム原理主義運動が母体になっており、フィリピン国民の多数派であるカトリック教徒をイスラム教徒に改宗させる宣教活動などを展開してきた。

治安当局は02年、中部ルソン地方タルラク州の北部にあったＲＳＭ細胞の拠点を急襲し、構成員数人を逮捕するとともに爆弾テロ計画のために準備したとみられる爆薬や銃器を押収した。また、03年３月10日には、公安警察が、テロ計画のために首都圏の戦略的に重要な地区の下見を行っていたＲＳＭ幹部のマリアノ・ロマルダ（Mariano Lomarda）容疑者（別名アフマド：Ahmad）をタギグ市内で逮捕し、手榴弾２個などを押収している。同容疑者は02年のタルラク州での摘発を逃れ指名手配になっていた。

ロマルダ容疑者は「（当時、国軍部隊の掃討作戦に晒されていた）『アブサヤフ（ＡＳＧ）』と『モロ・イスラム解放戦線（ＭＩＬＦ）』の最近の『敗北』に同情を表明する」ことがテロ計画の目的だったと供述している。

（注６）ＫＭＭ摘発の経緯

同国の治安当局がＫＭＭの存在を知り、摘発行動を開始するようになった経緯と背景に関しては、01年10月１日号の本欄で詳細を解説した。

（注７）ＫＭＭの結成

「マレーシア聖戦士集団（ＫＭＭ）」は、アフガニスタンで旧ソ連軍と戦った「ムジャヒディン」の一人、ザイノン・イスマイル（Zainon Ismail）が中心になって95年10月12日に結成された。中核を構成したのは、（アフガニスタンで戦ったか、軍事訓練を受けた経験を持つ）大半がパキスタンへの元留学生45人。99年以降は、そうした元留学生の一人で、ニック・アジズ・クランタン州首席相（ＰＡＳ最高顧問）の四男、ニック・アドゥリ・ニック・アジズ（Nik Adli Nik Aziz）がリーダーに就いた。

ニック・アドゥリは99年、ミンダナオのＭＩＬＦ支配地内の基地で爆弾製造の訓練を受けている。また、ＫＭＭは同年にタイ南部から11kgの爆薬を含む大量の武器を購入するとともに、インドネシア・マルク州でのキリスト教徒とイスラム教徒の紛争に「義勇兵」を派遣した。

ただ、ＧＡＭの構成員にはアフガニスタンで戦った『ムジャヒディン』も多く、『アルカイダ』との連絡ルートには事欠かない。実際にアイマン・アル・ザワヒリら『アルカイダ』の最高幹部が2000年６月にインドネシアを『視察』した際に、ＧＡＭ指導部とも会談しアチェ州内に『アルカイダ』の訓練基地を設営する計画を打診したことがある。しかし、ＧＡＭはこうした計画には同意しなかった。

また、ＧＡＭの反主流派である『自由アチェ運動行政評議会(ＭＰ－ＧＡＭ)』の代表は、ＪＩが実質的に主催するイスラム急進派諸組織の連絡会議(注８)に参加したこともあるが、やはり他の参加組織とは思想的に相容れなかったようだ。

とはいえ、世界各地のイスラム教徒地域での独立運動や民族主義的な組織にイスラム原理主義を注入し、『世界ジハード』の一環に取り込んでいくのが『アルカイダ』の重要な戦略のひとつである。アチェにも最近になって、『アルカイダ』の理念に同調する小さなグループが活動しているとの情報を入手している。こうしたグループは、現時点で軍事的な能力は極めて低くても将来は脅威になる可能性がある」

タイ最南部の新組織「プサカ」

――イスラム教徒が住民の多数派を占めるタイの最南部では、昨年来の警察官銃撃や軍・警察施設襲撃などで治安が著しく悪化してきたが、今年に入って仏教僧侶、教師、公務員などを狙った無差別殺人や学校に対する同時放火事件などへとエスカレートしている。こうした治安状況は国際的なイスラム原理主義勢力の動きと連動しているのか。タクシン首相らタイ政府高官は、犯行グループは基本的に武器・麻薬密売などに関与する犯罪組織メンバーか、せいぜいで分離独立派くずれの武装集団だと説明してきた。

「タイの治安当局が気付かないうちにイスラム原理主義に基づく宗教性・政治性をもった新しい組織が最南部で活動している。犯行グループを単なる犯罪組織や武装集団とするタクシン首相の説明は、事態の背景や本質に関して正しい見方を提供していない。

私がいま一番注視しているのが『プサカ(Pusaka)』というイスラム原理主義の宣教を通して、青年・学生を結集している新しい組織だ。といっても、この組織は97年に設立されており、地元のイスラム社会を隠れ蓑に非公然活動を行ってきたが、『9･11テロ』後に勢力は加速的に拡大しテロ攻撃を遂行するようになった(注９)。

１月４日に正体不明の武装グループがナラティワート県内の陸軍弾薬庫を襲撃し、兵士４人を殺害したのちに300丁以上の銃器を強奪する事件が発生したが、この武装グループの背後にあるのも『プサカ』だ。『プサカ』は旧来の分離独立派の諸組織(注10)とも連携し、これらの組織に原理主義と新世代の構成員を注入している。

もっとも、最南部での様々な銃撃・襲撃事件の実行犯には、分離独立派組織と連携する犯罪集団や武器・麻薬密売組織のメンバーも入っており、腐敗した行政当局者などが

(注８)イスラム聖戦士協会(ＲＭ)

イスラム急進派諸組織の連絡会議とは、99年にＪＩの政治指導者であるアブバカル・バアシル師が創設した「イスラム聖戦士協会(ＲＭ：Rabitatul Mujahidin)」の会議で、99－01年の間に計５回、いずれもマレーシア国内で「セミナー」の形で開催された。

これらの会議では、ＪＩの実質的な公然組織である「インドネシア・ムジャヒディン評議会(ＭＭＩ)」、ＭＩＬＦ、タイ最南部の分離独立派組織、ミャンマー軍政に抵抗するロヒンギャ(アラカン族イスラム教徒)やバングラデシュの急進派組織などの代表と、合法政党である全マレーシア・イスラム党(ＰＡＳ)の指導部も参加していた。このＲＭの会議にＭＰ－ＧＡＭのトゥーク・イドリス(Teuku Idris)も名を連ねていた。

ＲＭは、「アルカイダ」とＪＩがこれらの諸組織を「世界ジハード」運動に糾合する試みであったのは明らかである。

(注９)タイ最南部の同時多発襲撃事件

このインタビューを行った直後の４月28日、タイの最南部でイスラム教徒の若者グループによる警察関連施設に対する同時多発襲撃事件とモスク立て篭もり事件が発生し、若者グループに107人、警察と軍に５人、計112人の死者が出た(日本のメディアでも報道されたのでここでは事実関係は詳述しない)。

同事件に関して、チュラロンコーン大学の政治学者(国際関係論)で安全保障問題の分析では定評があるパニタン・ワタナヤコーン(Panitan Watanayagorn)氏は、事件に関与しているのは分離独立派「民族革命戦線(ＢＲＮ)」の分派組織「サリガット」で、同組織の青年メンバーの大半が「プサカ財団(Pusaka Foundation)」の経営するイスラム学校(ポー・ノー学校)の卒業生か現役学生であると語った。

「『プサカ』の傘下でイスラム原理主義を学んだ約２万人のうち、500～1,000人が小細胞に分散して最南部の各地で政府に対して武装闘争を展開しているというのが南部問題の実態である」(パニタン氏)

「プサカ」の教師たちにはインドネシアのイスラム寄宿学校(プサントレン)で学んだ経歴を持つものも多く、ＪＩなどインドネシアを拠点にするテロ組織との接点も浮かび上がる。

複雑に絡んでいる可能性があることも否定しない。テロの実行グループが分離独立派であり、犯罪集団でもあるという実態は、フィリピンのＡＳＧに類似しているといえるかもしれない。

『プサカ』については、まだ『アルカイダ』との直接のリンクの有無は明確ではない。しかし、確実にいえることは、『プサカ』は『アルカイダ』、ＪＩ、ＭＩＬＦ、ＡＳＧなどと同じ『サラフィ・ジハード』(世界聖戦)の旗に集った組織だということだ。この事実を看過すると最南部で進行しつつある事態の本質を見誤ることになる」

最初の犠牲者は日本人

――これまでの説明で、東南アジア各国の治安当局がＪＩなどテロ組織の幹部・構成員を逮捕・起訴している一方で、各地で『世界ジハード』の理念に啓発された新世代のテロリストが増殖していく実態もあることがわかった。日本企業の海外事業活動でもテロ情勢の的確な把握が重要になっている。

「小泉政権による米国主導のイラク戦争への支持表明と自衛隊の派遣で、日本人や日本の権益がテロの攻撃対象になる可能性が増大したのは確かだ。しかし、日本人が『アルカイダ』やその連携組織によるテロに遭遇する可能性は何も最近になって出てきたのではなく、10年も前からあった。日本人は治安面での国際的な現実に対する危機管理意識が欧米人と比較しても希薄だといえる。

東南アジアにおける『アルカイダ』のテロで最初に犠牲になったのは日本人だったことはそうした現実を認識させてくれる。94年12月11日、マニラ発成田行きのフィリピン航空機が沖縄・南大東島上空で爆発した『沖縄事件』で只一人犠牲になった池上春樹さん(当時24歳)がその人だ。この事件は『9・11テロ』の原型だとされた『ボジンカ計画(Oplan Bojinka)』(注11)に使用する爆弾の性能を確かめるために『アルカイダ』が実行したテロだったことがのちに判明した。

02年10月に発生したバリ島爆弾テロ(死者202人)では日本人の新婚夫妻が犠牲になったし、同年12月のマカッサルでの連続爆弾テロではトヨタ自動車のショールームが攻撃対象になった。

また、未遂に終ったものとしては、タイ・バンコクのカオサン通りで日本人や欧米人を殺害するテロ計画があった。ＪＩの軍事指導者、ハンバリ師が自爆テロリスト候補だったリリーことバシャール・ビンラップに、日本人などが集まるバーやディスコを攻撃対象として探すように命じた。02年２月から３月にかけてのことだ。結局、この計画はカオサン通りにおけるタイ警察のパトロール体制を調べた上で実行を断念することになった。フィリピンでは日系企業を対象としたテロ計画の存在に関する情報もあった。

こういう事例を紹介したのは、日本人と日本の権益に対するテロの脅威はかなり以前から存在しており、国際テロ組織が『ソフト・ターゲット』を狙うようになった現在では国籍を問わずテロに遭遇する危険は増大したということだ」

(アジア政治アナリスト　勝田　悟)

(注10)タイ最南部の分離独立派組織

分離独立派の組織としては、これまでに「パッタニー統一解放機構(ＰＵＬＯ)」とその強硬派に属する実働軍事部隊「バリサン・レボルシ・ナシオナル(ＢＲＮ：民族革命戦線)」、これら２組織から分離した「ブルサトゥ(Bersatu：統一)」などが知られている。

なお、ＫＭＭは報道や文献によっては「Kumpulan Militan Malaysia」と表記される場合もある。

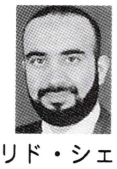
また、タイの情報関係者が最近最も活動的であると指摘している組織に「パッタニー・イスラム聖戦士運動(ＧＭＩＰ)」がある。

(注11)ボジンカ計画

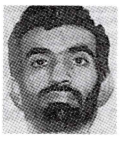
成田空港を含むアジアの複数の空港から米国に向かう旅客機11機を太平洋上で同時爆破するとともに、その混乱に乗じてハイジャックした別の航空機が米中央情報局(ＣＩＡ)に突入するという未遂に終った「アルカイダ」のテロ計画で、実行時期に想定されていたのは95年１月下旬だった。

マニラを実行拠点にしており、同市内で逮捕された容疑者の一人がパイロットの訓練を受けるなど同計画は米同時テロの「原点」だったとされる。「沖縄事件」は同計画に使用する爆弾の性能を確かめるための予備的なテロだったことがのちに判明した。

ボジンカ計画の首謀者はクウェート国籍の「アルカイダ」ナンバー３、ハリド・シェイク・モハメド(Khalid Shaikh Mohammed：03年３月にパキスタンで逮捕され、現在は米治安当局の拘束下)で、「9・11テロ」では実行犯のリーダー格だったモハメド・アッタ(死亡)とオサマ・ビンラーディンを繋ぐ「オルガナイザー」だった。



ハリド・シェイク・モハメド



ラムジ・ユセフ

また、「沖縄事件」でフィリピン航空機内の座席の下に爆弾を仕掛け(自らは途中のセブ島で同機を降り)たラムジ・ユセフ(Ramzi Yousef)はハリドの甥であり、93年２月に起きたニューヨーク世界貿易センタービル爆破事件の首謀者でもあった(終身刑判決を受け米国内で服役中)。このように、東南アジアは90年代の前半から「アルカイダ」のテロ活動における重要な拠点地域だった。